

研究課題名： 韓国の ODA—その変遷と特徴—

私は、2025年5月27日から26年3月31日までの約10か月間、大韓民国延世大学にて在外研究を実施した。その研究概要につき、以下、簡単に報告する。

<研究のテーマ、内容および進展・成果について>

在外研究申請にあたって提示したテーマは、「韓国の ODA—その変遷と特徴— (Korea's Official Development Assistance: Its Historical Development and Features)」というものであった。韓国は1996年の OECD 加盟以降、急速に ODA を拡大し、今ではアジアの中ではその規模は国によっては日本の ODA と拮抗し、また、資源国を中心としたアフリカにおいてはむしろ日本を凌駕する規模とさえなっている。アジアの ODA という、従来、日本の ODA に関するものが中心であった。今世紀に入り、中国が積極的に途上国援助を拡大する中、中国の援助に関する研究もさかんになっているが、同様に急速に拡大する韓国の ODA については、いまだ研究は多くない。日本や中国の援助を念頭に、「東アジア型援助」という概念も登場しているが、では、韓国の援助はどういったものなのか？それは日・中の援助とともに「東アジア型」といえるものなのか？こうした問いに回答を与え、やがては「東アジア型援助」を欧米のそれと相対化する形でモデル化することを目指し、本研究はまず、韓国の ODA の誕生・変遷とその特徴を明確にとらえようとするものであった。

日本国内においては、韓国の ODA に関する研究は多くないといってよい。援助研究においても、韓国が取り上げられることはほとんどない。そこで、本研究はまず、韓国 ODA は何なのか？どのようなことをしてきたのか？そしてその意味は韓国の国内的にはどういうことか？——こうした事実確認から始まった。(私にとっても初めての研究対象であり、渡韓前に日本の ODA 関係者へのインタビューを試みたが、韓国 ODA に関する知見・経験はほとんど言及されなかった。

韓国の ODA は日本以上に分散された組織・体制下で計画・実施されており、外務部関連機関および財務部関連機関に分けたアプローチが必要である。それぞれの関連機関の公式報告書などをレビューし、整理してその発展を辿る中で、とある実務家兼研究者との議論の中で気づかされたのが、強力な大統領制下の政策変化という日本ではありえない観点の存在であった。「この手」の政策変更には、ときとして合理的な説明・理解は成立しない。また、「有能な官僚機構」の中で積み上げられてきた議論さえも実質的に意味を持たないことがある。これは日本との大きな違いである。他国の政治・政策変更を理解する難しさを改めて実感した次第であった。

事実・記録を追うことの重要性に加えて、韓国における研究環境の中であらためて認識させられたことが、韓国語および英語の世界における韓国 ODA 研究の一定の蓄積の存在であった。韓国人研究者の英語による発信の量および留学中の韓国人大学院生の英語による学位論文、さらにはダイナミックな変貌を遂げる韓国に対する世界中の興味からか、韓国では、当初の想定をはるかに超える量の英文研究業績が入手可能であった。ただし、後述するとおり、他の研究との関係で、本研究に本格的に取り組むようになった時期が少々遅延したこともあり、収集資料の読み込み・分析と関係者へのインタビュー実施を26年3月末までに完了させることはできなかったのが残念であった。つまり、研究はいまだ結論を導き出す段階に至っていない。帰国

にあたって持ち帰った大量の資料の分析に加え、未実施のインタビューや韓国人研究者とのディスカッションについては、引き続き今年度継続して実施する予定であり、その後、近いうちに論文としてとりまとめ、発表することとしたい。

ここで上述の「他の研究」について簡単に触れておくと、在外研究期間の前半、特にウォンジュからソウルへ移動して国会図書館および朴正熙大統領記念図書館の資料にアクセスができるようになったことは、25年度社会科学研究所叢書原稿に応募し、無事採択された韓国の開発主義に関する書籍原稿を当初想像した程度以上のレベルでブラッシュアップすることを可能とした。コロナ以前の現地調査等に基づいてまとめてきた元原稿であったが、今回、国会図書館およびその他随所で「その後」の重要な研究成果が現れていることを認識し、利用することができた。また、詳細なデータなど、確認・更新する機会のあることもあらためて確認された。これにより、ODA 研究には上述のような遅れが出ることとなってしまったが、書籍原稿がさらに改善されたことは幸いであった。

<期間中の研究活動とその環境について>

延世大学は韓国内に3つの大きなキャンパスを有するが、私の受け入れ先（カウンターパート）となったグローバル創意融合学部（College of Humanities & Social Science Convergence）グローバル行政学科（Dept. of Global Public Administration）は、首都ソウルから100キロほど離れた江原（カンウォン）道原州（ウォンジュ）市に設置された同大学未来キャンパスに所在する。ウォンジュ市の中心から約8キロ離れ、美しい湖（天然湖ではなく貯水池）と低山に囲まれた広大な敷地に趣ある建物が点在する風光明媚なキャンパスである。約5キロ離れた鉄道駅（ウォンジュ駅）およびそれ以上の距離にある市の中心部との間には、大学のシャトルバスおよび一般の路線バスが往復しているが、「人里離れた」感は否めず、学生の大部分および教員の一部はキャンパス内の寮・宿舎に居住して勉学・研究に励むことになる。複数の食堂・カフェ等に加え、銀行や郵便局もキャンパス内に支店を構え、一切がキャンパス内で揃う。キャンパス内外の治安は良好であり、昼夜を問わず、治安上の問題はない。

巨大な図書館の学習室は、学期中は24時間利用可能であり、施設は極めて快適。蔵書はソウルの新村（シンチョン）キャンパスと比べるべくもないが、「大学内」の取り寄せが可能な他、膨大な電子資料は当然いずれのキャンパスでも、また、在宅でも利用可能であり、理想的な研究環境が整備されていた。ソウルのシンチョンキャンパスとの間には1日に2往復、無料のシャトルバスがあつて、利用可能である。ただし、その距離およびソウル市内の交通渋滞のため、シャトルバスの所要時間は片道3時間程度となることもあるそうで、通常の移動には高速鉄道とソウル地下鉄を利用した方が早い。

いずれにせよ、大学「外」の施設や人物訪問・調査にはウォンジュは極めて不便な場所であり、私は渡韓後、最初の1か月半程度をウォンジュの未来キャンパスに居住し、教員や大学院生たちとセミナー、ディスカッションを重ねたのち、7月半ば、ソウルで開催されたIPSA（International Political Science Association: 世界政治学会）世界大会（World Congress）への参加を機に、滞在先をソウルに移し、延世大学新村キャンパスの図書館および国立国会図書館等を主たる研究の実施場所とした。（この移動は当初より計画したものであった。）ウォンジュキャンパス所属の教員たちも、授業や会議のためしばしばシンチョンキャンパスを訪れてお

り、受け入れ先教員とソウルで面会し、議論や打ち合わせをすることもしばしばであった。

韓国国会図書館は、外国人でも登録さえすれば自由に利用可能であり、韓国内で出版されたすべての書籍に加え、海外で出版された韓国に関する多くの著作、そして各種分野の海外ジャーナルを所蔵する。閲覧申請や帯出・返納の手続きもきわめて合理的にデジタル化されており、非常に「使い勝手」のよい施設である。

ソウル滞在中は、上記2図書館を中心として、その他、大統領記念図書館や政府機関の資料室などを利用し、充実した研究活動を実施することができた。また、全羅南道光州市や慶尚北道大邱市など、韓国の政治史上重要な役割を果たした地方都市も訪問し、関連施設を訪問・資料収集を行ったため、従来やや「薄っぺら」であった韓国の政治・歴史・社会・文化に対する理解が格段に深まったことは、今回の在外研究の大きな成果の一つである。

<研究成果と今後の展望、そして教育への効果等について>

研究成果についてあらためてまとめると、上述のとおり、以前から手掛けていた書籍原稿をより充実させる形で完成させ、26年度中出版の形までこぎつけることができたのは大きな成果であった。そのうえで、この度着手した ODA 研究については有意な進展を見たものの、その完成までには今しばらく研究を継続することとなる。しかしながら、将来の共同研究や共同出版プロジェクトの計画も視野に入ってきており、今回の在外研究をきっかけとして新たな充実した研究が望めそうである。総じてきわめて有意義な在外研究期間であったと感じており、こうした機会を与えられたことにあらためて感謝することといたしたい。

こうした研究成果と今後の研究発展の可能性については、ぜひ教育にも反映させてゆきたい。教育への具体的フィードバックの例としては、26年度、延世大学大学院と大学院レベルの交流を試行することを協議中であり、政治経済学研究科および同研究科所属の院生協議会、そして延世大学側と協議を進めている。幸い、延世大学側が国際交流の予算を確保しており、同予算を用いて延世大学側（教員および院生）が来日し、明治大学にて合同セミナーを実施する予定である。これをもって政経研大学院生に、国際セミナーの経験を与えるとともに、海外のカウンターパートと「協働する」経験を提供できると考えている。

なお、最後に一つ付言しておく、延世大学は国際大学ランキングでも非常に高い評価を受けている韓国の名門大学であり、上述のとおり、在外研究先としても図書館をはじめとしたその研究環境は素晴らしい。ただし、特にウォンジュキャンパスの場合、地方都市に位置することもあり、不便のない研究生活を送るためにはある程度の韓国語は必須ともいえる。

以 上